

卒業生による講演会 第10回

「地球一周の船旅からこんな国こんなところ見て歩き」

10MA 渡邊修也

(H28.12.21)

地球一周の船旅から 10期 機械科卒業 渡邊修也



こんな国、あんなこと見て歩き

自分の人生七〇有余年のご褒美として、地球一周の船旅に行ってきました。

期間：2016年4月12日～7月26日

企画・主催：NGOピースボート、株式会社ジャパングレイス

船のサイズ：全長 205m、最大幅 26・5m

総トン数35,265t 乗客定員1,400人



今回乗船者：約1,000名 年齢：17歳～92歳 男女比：女60% 男40%

年代別：10～40代：20% 50～60代：45% 70歳以上35%

さて横浜港大栈橋を出帆し、翌日に神戸での乗船客を乗せていよいよ地球一周一〇六日間の船旅の始まりである。

まずは寄港する国々へのルートを記す。

マレーシア、シンガポール、スリランカ、インド洋から紅海に入りスエズ運河を通過。

地中海に入るとキプロス島に寄港、十二日ぶりの上陸だ。その後ギリシャ、イタリア、スペインの地中海の各都市に寄港した後、大西洋に出るのだが、私はギリシャで一時、船を離れオプションのツアーで空路、ポーランドへ飛んだ。

ポーランドから再び空路スペインへ。港で船に合流後ポルトガル、フランス、イギリス、ドイツ、スウェーデン、ロシア、デンマーク、フィンランド、ノルウェー、アイスランド、北緯66度33分以北の北極圏海域遊覧から大西洋横断しカナダの東岸のシャーロットタウン、そこから大西洋を南下して南米のベネズエラ、その隣り小さな島国キュラソー、そしてパナマに寄港した後、パナマ運河を通過して太平洋へ出ると北上、中米のグアテマラに寄港、そして最後のハワイではホノルルで一泊してその後は太平洋を十一日間の横断航海し、横浜へと帰港する一〇六日間である。

次に印象的な見たこと体験したことを紹介したいと思います。

シンガポール

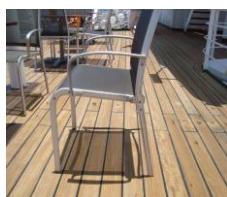
太平洋戦争時に侵略した日本軍による理不尽な残虐行為の生々しい写真に言葉もなし

スリランカ

象の保護と観光を一体化させた象の保護施設や糞を原料にしたリサイクルペーパー工場を見学、そこで作成されたハガキで便りを出した

インド洋上

スリランカを出港してからは十二日間、海また海の世界、海賊が出没するといわれるインド洋を海上自衛隊の護衛艦に付き添われ、船窓は目隠しされての一週間の航海だった。



洋上では太陽が真上にくる時間帯があり、一時的に影が横に出来ない。

赤道と回帰線の間地域だからこそその現象である

ポーランド (アウシュビッツ)

ここで四日間、強制収容所及び関連施設を検証し、そして地元の高校生たちと交流会があった。

日本人案内員の説明を聞きながらナチスドイツの残虐な行為の実態を写真や、収容者の多くの遺品を見て、ガス室や銃殺によって理不尽に処刑された収容者に思いを馳せ、戦争という状況とはいえなぜこのようなむごい行為に至ったのか考えさせられた。

イギリス

ドーバーに寄港、同室の仲間とロンドンまで列車、宮殿の衛兵交代式は終わり、帰路につく衛兵の行進を見てとりあえず満足。

その後、テムズ河を舟で下り、世界の標準時の基点であるグリニッジ天文台へ行き、経度「0」のラインを跨ぎ東経・西経を往復してはしゃいだ。

フィンランド

現地の生活体験でヘルシンキ郊外の家庭を訪問し、北欧名物のサウナ風呂に入りましたが、独立したサウナ小屋で窓のない真っ暗な部屋に男女混浴、室温90度~100度ですが水風呂はなく、外に出て天然の冷気かシャワーで冷やすのだ。

ロシアのサンクトペテルブルグ

ロシアの民芸品マトリョーシカ作りに参加。自分の顔をモデルに色付けしたけど他人に見せられない駄作となった。

デンマーク

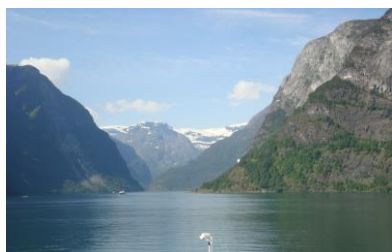
コペンハーゲンでは自転車街の中をサイクリング。さすが自転車王国で、交通ルールも守られている。

ノルウェー

なんと言ってもフィヨルドである。バスと列車で往復6時間余の溪谷美の景観を楽しみ、

途中には轟々たる水量を殴り落とす滝に息をのむ感動を味わったものだ。

ノルウェーのベルゲンを出港した翌日は、**海からのフィヨルド遊覧**、切り立った峡谷は雄大である。



北欧の各地を回っていた約一週間は雲ひとつない青空に恵まれて北緯六十度近いのに汗をかきほど暖かく感じたものだ。ところが同じ緯度でもグリーンランド沿岸では何故か俄然寒くなり、海は流氷に覆われてきた。

さらに流氷群を逃れたと思ったら、今度は冰山だ。小さい塊でも相手は固い氷だから衝突すれば船には痛手。でも我々乗客にとっては珍しいので大はしゃぎしていた。

この現象はアイスランドという小さな島国を挟んで、東側は南のメキシコ湾の方からの海流で比較的暖かく、西側のグリーンランド沿岸は北極からの冷たい海流のため流氷や冰山が流れてくるというわけだ。

さて、一〇日余りの寒い地域から船は一気に南国へ向かう。**カナダのシャーロットタウン**を出て大西洋を南下、南米は**ベネズエラ**へ。

ラグアイラに寄港した。有数の貧困国とも言われたが、近年は社会改革が進み貧困率も下がり生活向上したものの、まだまだ街中は未整備で犯罪も多発しているようだ。

この国では貧困から犯罪へと進む子供たちを救うため、「エル・システム」といわれる無料で音楽教育が受けられる制度がある。そうした青少年の楽団との交流があり、私も船内で習った和太鼓を仲間たちと演奏し、国際交流を深めたのである。

キュラソー、

こういう名前の国を知っていますか？オランダの構成国でカリブ海の南端で南米大陸にしがみつくように浮かぶ小さな島、人口わずか一五八千人、名物は川幅約二〇〇mの川に架かるクイーンエマ橋だ。約二十艘のボートが橋桁になっていて舟の往来のたびにそのボートが動いて橋が開き、舟が通行できる。人が渡りきれないこともあり、その時は橋が元に戻るまでしばらく待たされるのである。

パナマ

クリストバルという運河の入口の港町からバスとボートで原住民エンペラ族との交流へ。ボートが鬱蒼としたジャングルを抜けると彼らのコミュニティに到着。

お出迎えは裸に派手な布を巻きつけただけのような女性たちが整列して歓迎された。成人男性は木の葉で作ったパンツのみ、子供はまさに素っ裸。木登りや元気に走り回っている。我々は船から持ち込んだ和太鼓を演奏したり、折り紙や剣玉を教え、住民たちは民族踊り

や歌を披露して交流をしました。

パナマ運河

早朝から夕方までほぼ一日かけて渡ります。船は自力での運航はできず前後左右をワイヤーロープで機関車につなぎ機関車が引いて進む。

さて運河を出るとそこは太平洋、北上してメキシコに隣接する**グアテマラ**へ。

かつてマヤ文明で栄えた地。標高一五〇〇メートルの古都アンティグアという町は碁盤の目状の道路でわかりやすいが、舗装の代わりに石が埋め込まれ歩きにくい。

ちょっと立ち止まっていると物売りがしつこく寄ってくる。ほとんどがグアテマラレインボーといわれる原色で多色織の肩掛けなどの織物である。

グアテマラを出港しハワイのホノルルまでは、一週間の船上生活で、この間に船内では**一大イベントの運動会**が企画されている。誕生月ごとに4組に別れ、実行委員を選出、各組は団長・副団などを決めて、老いも若きも一緒になって参加することに意義がある。なにしろ開始時刻に集合した各組の人数が得点に反映されるので、団長などの役員は呼びかけに懸命だ。女性の団長や女応援団長もいて勇ましいこと、圧倒される。

綱引き、大縄跳び、百足競争、障害物競走など学校の運動会に劣らぬ種目を、船の狭いデッキで実施可能にするのは若者たちのアイデアとやる気の為せるわざである。

優勝した組には船内の居酒屋で一時間の飲み放題という特典があるので、それぞれに熱き闘いとなるのだ。

私もこうしたイベントが好きで、年齢を忘れて頑張った結果は翌日から発熱の憂き目。

個室へ隔離

医務室で診断の結課はなんと**インフルエンザ**である。実は私は四人部屋に住んでいるが、四～五日前に一人がインフルエンザで個室に隔離された。回復した彼が戻ってきたのと入れ替えに私が入院（隔離）となってしまったのだ。隔離生活から三日間で戻ったあと、まもなく最後のホノルルに寄港。

ホノルル

二日間の滞在中、部屋の仲間とレンタサイクリングでダイヤモンドヘッドへ行ったりワイキキで水浴びしたり、三ヶ月ぶりに散髪に行ってきた。

他の1日は真珠湾のアリゾナ記念館とポツダム宣言受諾調印式の会場となった戦艦ミズーリを見学。この旅の前半にシンガポールやアウシュビッツなど太平洋戦争の負の遺産を検証し、最後はその戦争の終結の場で締めくくったことになる。

幻の一日

今回の船旅は西回りで最後は太平洋を東から横断することになり、出発時からの時差の関係で経度一八〇度を通過するとき一日分が消滅するのであるが、船旅のおもしろさで夜中に一時間だけ、わざわざ「幻の一日」を設定して、ほぼ通常の一日の行事を早送りで行って楽しむのである。

そして…

一〇六日間のうち三分の二が船内での生活で、その間は夏祭り、カラオケ大会、ファッションショー、餅つきのほか、いろいろなジャンルの専門家による講座や無料の英語・スペイン語の各教室もある。また我々乗船客自身が企画するヨガや太鼓など趣味の活動、旅行主催者の企画に客の有志が加わって開催する行事などがあって飽きることはない。

そして日本全国から集まった客同志で会話が弾み、一〇六日間があっという間に過ぎてしまったが、振り返ればその間に日本では熊本の大地震や参議員選挙など大きな出来事があった。やはり長旅であり、ぐるっと一周して地球の丸さを実感した旅であった。